

《日記》 二年生のほじまり

クロイヅン 小三

きょうほしゅう校の二年生がはじまりました。ぼくのクラスの先生は、金子先生です。



あさ車の中で、とてもどきどきしました。はじめて学校へ行く一年生になった気分でした。

でも、きょうしつに入って先生とおともだちのかおを見たら、こわい気もちはどこかへ行ってしまいました。それに、二年生になってさいしよの日に、トロフィーももらえて、とてもうれしかったです。

【評】〇〇くんがどんな気持ちで二年生の最初の日を過ごしたのかがよく分かりました。気持ちを表す言葉を正しく使えているのにも感心しました。これから一年間みんなと仲良く楽しく勉強しましょう。

《日記》 三年生になった日

アクトン 小三

三年生になってとてもうれしいです。がんばります。

アクトン 小三

さいしよはきんちようしたけど、クラスのみんながやさしくてほっとしました。

アクトン 小三

三年生になってたのしい！かんじスキルたのしかったし、じこしよかいがいちばんすきだった。きょうかしよはとてもおもいです。

アクトン 小三

三年生になってクラスがかわって、じこしよかいでみんなのことをもっとしれました。楽しかったです。

アクトン 小三

三年生になって、かん字がふえましたが、みんなががんばっていたので、わたしもがんばろうと思いました。

【評】三年生になった気持ちを一言日記の形で授業中に書きました。ひとことなのに初めての日の緊張とこれからのやる気がひしひしと伝わってきます。

《物語文》 エミールから見た

「少年の日の思い出」

アクトン 旧中一

僕が二週間かけてやっと蛹からかえしたクジャクヤママユがボロボロになった姿を見たとき、言葉が出なかった。まず、頭をよぎった考えは、誰が何のためにやったのかだ。僕をねたんで悪人がやったのか、それとも猫がやったのか。いろいろな考えがあふれ出てきた。「はっ」と気がついて我に返った。急いでにかわを持ってきて、継ぎ合わす準備をした。以前はあんなに煌びやかに光っていたクジャクヤマ

マユは、なんとも無残な姿となっていた。慎重に蝶を分析してみると、前羽一つと触角一本を無くしていた。こうなると、もうなす術もなく、とても直る気配はなかった。

しばらくたち外が真っ暗になった頃、女中が客人だと僕に伝えた。中庭の向こうに住んでいる少年だった。彼に今日起こった悲劇を話すと、彼はその蝶を見せてほしいと言った。彼は圧迫されそうなくらいに重苦しい空気を放って僕の家に入ってきた。この時、僕の心に不安と疑いが芽生えた。もしかしてこいつがやったのではないかと思いながら、自分の部屋の戸を開けた。彼は蝶を見て、僕の方に振り向いた。そして真剣な顔で、それは彼がやったのだと言ってきた。なんとなく気が付いてはいたものの、やはり驚いた。まさかこいつがやったなんて信じられなかった。やるせない怒りを抑え、僕は彼に冷徹な態度をとった。だが、次に彼が言ったことには、はらわたが煮えくり返る思いだった。こいつは僕が大切に育てたクジャクヤママユの代わりに、他のものをくれるというのだ！失礼にも程がある。



「僕のクジャクヤママユを埋め合わせることもなして出来ない」と思ったが、決して口にはしなかった。怒りのあまり絶対に彼の償いを受け入れなかった。彼は今にも吐きそうな青い顔で中庭を抜けていった。そこに残ったのは、暗闇と静けさだけだった。【評】主人公を変えて、違う視点から物語を書きました。本文では、冷徹な少年として描かれていたエミールの心情を本文の表現とオーバーラップさせながら、複雑かつ繊細に書き表すことができました。比喩表現や情景描写も絶妙です。